高松短期大学紀要　第二十号　三三～七一頁（一九九〇）

# 伊勢日記私注（七）

## ―その終章―

松原輝美

### 第十三段

歌召す奥に書きてまゐらす

（三）

三　山川の音にのみ聞く百敷を身をはやながら見るよしもがな。

【通解】

（あれは、延喜も四年の、秋の頃でございましたでしょうか、醍醐の帝から主人伊勢の許に）歌のお召しがございました。（主人は恐懼して、いくつかの歌どもを献上致したのでございますが、その献上歌を書きとどめました草子の）奥に、（その時の思いをこんな歌に）託しましたのでございます。

（昔は宇多の内裏にお仕えした私でございますが、今は華やかな）宮居のことは、山の谷川の高い水音のように、ただお噂として伺いますばかり、願わくば、谷川の「水脈（みお）」が早いと申しますその如く、このわが「身」をも昔にかえし、（以前に変らぬ晴れがましい姿をそのままに、今ひとたびの）宮居に伺候する幸せの身となりとうございます。

【注解】

二類本はこれを落している、本段のこの歌は『古今和歌集』巻第十八、雑歌下の巻末に1000番歌として、ここと全く同じ歌句に、これもこと同趣旨の詞書を付けて採歌されているものである。

そのことについては前段に於いて言及し、この歌が『伊勢集』冒頭の物語的部分のこの位置に配されている意味についてもまた既に詳述して来た。それゆえ、ここではこれを改めて取り上げることをせず、次の第十四段、これは、『伊勢集』冒頭の物語的部分の終章となる段であるが、その段に移ってゆきたい。

序でながら、この歌は前述の通り『古今和歌集』では、

歌召しける時に、奉るとて、詠みて、奥に書き付けて奉りける

という、『伊勢集』と同趣旨の、だがより具体的な詞書を伴って採歌されているものである。それは、『古今和歌集』を撰集するに際して、醍醐の召に応じて奉った歌どもの、それらを整えた巻子の末に添えら

れたものである。

ところで、その巻子に録された歌どもの、その一つであったかと中田武司氏が推定される一首が、これは『古今集』巻第一、春歌上に、61番歌として収録されている。（中田武司氏『伊勢』）それは、

弥生に閏月ありける年よみける　　伊勢

61桜花春加はれる年だにも人の心に飽かれやはせぬ。

とあるものである。

花を惜しむ歌で、これは『和漢朗詠集』にも採られている。それは、閏三月のあった年、つまり三月が二度あるわけで、「桜花よ、春がひと月加わっている今年だけでも、見る人の心に、十分に満ち足りて美しさを味わったと思われようとしないかよ」（新日本古典文学大系『古今和歌集』脚注）という、春三カ月が四カ月になった年に詠まれた。

その年に当るのは、伊勢の在世中では、仁和元年（885）と延喜四年（904）との二度がある（『日本暦日原典』雄山閣刊）が、仁和元年は伊勢の推定年齢は九歳、片桐氏説に従っても十四歳で、この歌の詠者としては稚な過ぎる。ここはやはり28歳、或は33歳の歌柄とみて、この歌は延喜四年（904）の詠とみるべきであろうから、これは『古今和歌集』撰進の前年に詠まれたことになる。本段の「山川の」の歌と同年の作ということになる。

『古今和歌集』の撰集のことが、日程にのぼって来た延喜の初年にあって、伊勢は確実に、古今集の撰者たちの目にとまる活躍をしていたといえよう。

## 第十四段

・・・・・　（なやましくせさせたまひ）　（に）

この后の宮、常にあつしく・おはしまし・けるを、つひに六月八日ぞ亡くならせたまひにける。あさましく、いらなく悲しく・

かくれさせ・・）　（いみじく）　（て、）

（夜昼）　（恋ひたてまつ）

仕うまつりし人、さながら集まりて、・・泣きわぶ・・・・るに、

・（御）　（折・・）　（の・・）　・・

後々の・わざのいそぎにやうやうなりぬ。雨いたく降る日、この

・・・・・・（下・）（籠）（ゐたり）・

身を心憂しと言ひし人は、曹司になむをり・・・ける。上の人々

（緒・・・）（し・）

集まりて、御わざの組・の糸をなむ縒りける。下なる人、糸は縒

（果て）（ふへかな）・・ただ）・（ここに

りいでたまへ・・・りやと・・今は何わざをかしたまふ、と言ひ

は・・・）（なむ見出だして）（侍る・）・（げ）（れば）

たれば、雨を・・・・・・ながめてなむとぞ言ひあひたりける。

（おもと）（し・・）（は）（を）

上の御・・たちの返りごとに・糸は縒り果てて、今は音・なむ縒

（ひおこせた）

り合はせて泣き侍ると言へりけ・・れば、下なる人、

（三）（なる）

四三縒り合はせて泣くらむ声を糸にして我が涙をば玉に貫かなむ。

【通解】

（主人伊勢がひたすらに敬慕して参りました）お后の温子様は、久しい以前から病気がちでいらっしゃいましたが、とうとう（延喜の年も七年の）晩夏の頃におかくれになってしまわれたのでございます。

（そのあまりに若い御逝去は）どうにも信じ難く、悲しみは刺となって心に痛く、お傍に侍っておりました者たちは、（お后様御生前のお居間に）残らず集まって、現し心もなく嘆き悲しんでおりますあいだにようやく、四十九日の御法要の用意をする時となりました。

（そんな頃の、晩い夏の）雨がひどく降る日、（先に）わが身を「心うし」と言って、（また、宮仕えをしていました）主人伊勢は、（語る人とてもなく、孤り御自身の）曹司で（降る雨をながめて）おいでございました。（御生前、お后のいらっしゃった）上のお居間に仕えていた女房たちは、（今も同じお居間に）集まって、（同じ雨の音を聞きながら、）御法要に使う組緒の糸を縒り合わせておりました。

（そこへ、）下の曹司におりました主人伊勢が、「もう、糸は縒ってしまわれましたようね。今は、何をしておいでなの。私は雨を見て泣いておりますの」と上の方へ言上致しましたところ、（㊟この条は三類本による。）上にいる女房たちの返事には、「（私たちも同じこと。）糸は全部縒り終わって、今はみんなで声を寄り合わせて泣いておりま

す」と言って来ましたので、主人伊勢は（再び、こんな歌を詠んで差し上げたのでございました。）

より合わせて泣いていらっしゃるという皆様方の声を糸に縒って、私の涙を玉にたぐえて貫ぬいていただきたいものでございます。

【注解】

**○この后の宮、常にあつしくおはしましけるを、つひに六月八日ぞ亡くならせたまひにける。あさましく、いらなく悲しく、仕うまつりし人、さながら集まりて、泣きわぶるに、後々のわざのいそぎにやうやうなりぬ。**『伊勢集』冒頭の物語的部分は、前段から二年と半歳の余の空白を置いて、ここに温子中宮の崩御のことを語ることになる。中宮の崩御は延喜七年（907）六月八日のことであった。薨年は三十六歳、ここに『伊勢日記』の終章を構えようとした作者女房は、温子のその若い死を語って、哀切を極めた詞章に言葉を尽くしている。

その温子は「常にあつしくおはしましけるを」とあるが、その前々年の延喜五年五月十五日に落飾しているのも病のためであろうか。さきにも「かかるほどに、御息所悩みたまひければ」（第六段）とあった。

亡くなったのは、延喜三年（903）に、温子がそれまで宇多と同居していた朱雀院を出て移っていた東七条宮すなわち「亭子院」（第十段）であった。

衆人の哀惜のさまが二類本では「仕うまつりし人々も、さまざまに集まりて、夜昼恋ひ泣き奉るに」、三類本では「仕うまつりし人、さながら集まりて、夜昼泣き恋ひ奉るに」と、それぞれにいっそう強調されているが、温子の存在のみをよりどころとして生きる伊勢の悲傷もいかばかりか、と秋山氏はこのこの二条を注されている。

この条は「常になやましくせさせたまひけるを、」と主格を落して語りはじめてゆく三類本（二類本も「常になやましうのみし給ひけるを、」とあって、直ちに述部からはじまるのは三類本と同じである。）はやゝ唐突である。これは、直前の第十三段の、醍醐の召しに応じて作られた歌を越えて、第十二段の温子との「花薄の贈答」に「后の御心は」或は「宮より」と温子のことが明記されていた、その段に文脈として直接つながるとみての処置であろうか。

二類本になると、一・三類本にある直前の第十三段は完全に落ちて、この条は、

御返し

三　呼ぶとても音には聞えで花薄忍びに招く袖も見ゆめり。

またまゐらする

三　人も着ぬ尾花が袖に招かればいとどあだなる名をや立ちなむ。

常になやましうのみし給ひけるを、つゐに六月の八日になむか

くれ給ひにけり。

といった具合に、直ちに第十二段の「花薄の贈答」の段に接している。

これに対して一類本は「この后の宮、常にあつしくおはしましけるを、」と筆を改めてこの条をはじめている。

実は一類本ではこの段は、『伊勢集』冒頭の物語的部分にではなく、後続歌集の終わり、つまり『伊勢集』の最末尾に位置されているのである。諸家の説かれるように、これは錯簡脱落とみるよりほかないであろう。脱落したものを後から補入した、その処置が改まった書き出しを要求したのであろうが、以後の本文は、二・三類本と殆んど異同はない。

ただ一類本にのみ「いらなく悲しく」とある、その「いらなし」の「イラは草や木の刺。ナシは甚だしい意。刺が鋭い、また、刺が突きさして痛いことが原義」（岩波『古語辞典』）とある。思いもかけぬこととて、悲しみは刺となって心に痛く「泣きわぶる」程に四十九日の御法事の用意をする頃となった、というのである。

温子の崩御は六月八日、それに「後のわざ」に至る時間を加算すると、この年の六月は大の月であるから、四十九日の法要は、延喜七年七月二十六日となる。これをユリウス暦に換算すれば、「温子の後の御わざ」（三類本）の日は西暦九百七年九月六日である。（『日本暦日原典』）

朝夕は既に秋気の至る候である。

**○雨いたく降る日、この身を心憂しと言ひし人は、曹司になむをりける。上の人々集まりて、御わざの組の糸をなむ縒りける。**

「この身を心憂しと言ひし人」は伊勢。宇多天皇の寵愛を受けて皇子まで産んだ伊勢は、七条の后が住む亭子院においても、他の女房とは扱いが違っていた。先に、子供を失って「身を心うが」（第十二段冒頭）っていた伊勢は、后の宮の御座所近くで法事の準備をする他の女房たちとは別に自室にいたのである、と片桐氏は注されている。

時節は朝夕に秋気を覚える九月である。降りしきる折からの雨が、その秋気をいっそう深める一日、伊勢は一人自室に籠っていて、他の女房たちは生前の温子の居所に集まって、五色の糸を縒り合わせている。その糸は法要の日に仏に奉る名香を包む、その紙に結びかけるのである。その伊勢の上にも、女房たちの上にも、秋の雨は、音を沈めて降りしきる。

雨は憂愁の友。もう10年に近い昔、桂に離れて住む皇子を思いやって「ながめ」していたのも雨の日であった。あの雨は、そなたの涙ね、そう言って慰めてくれた温子の温容が今日もまた立ちもどって来る。

もう、糸は縒ってしまわれましたようね。今は、何をしておいでなの。私は雨を見て泣いておりますの。（三類本）

一類本は、この条を、

「糸は縒りいでたまへりや」と、「今は何わざをかしたまふ」と（伊勢の）言ひたれば、「雨をながめてなむ」とぞ（御たちの）言ひあひたりける。上の御たちの返りごとに、「糸を縒り果てて、今は音なむ縒り合はせて泣き侍る」と言へりければ、

と、「雨をながめて云々」を上の女房たちの言動に作っているが、こゝは、伊勢の言葉と行為に作って、

「糸は縒り果てたまふへかなり。ただ今何わざをかしたまふ。ここには雨をなむ見出だしてながめ侍る」と（伊勢の）言ひ上げたりければ、上のおもとたちの返しには、「糸を縒り果てて、今は音をなむ縒り合はせて泣き侍る」と言ひおこせたれば、

となっている三類本の方が達意である。二類本も三類本と同じ文脈である。

「雨を見て泣いている」と言う伊勢の言葉に、「私たちも同じこと、糸は縒り終わって、今はみんなで声を寄り合わせて泣いております」と上の女房たちが言って来た。それに対して、伊勢は再び言い上げるのである。

あなた達が泣き声を縒り合わせたとおっしゃるその糸に、私の涙を玉にして通してほしいものでございます。

亭子院のこの憂愁の一段は、『源氏物語』の「総角」の巻に、薫中納言が八の宮の周忌も間近い頃、宇治を訪れる場面の、その中に延展されている。そう示唆されて、秋山氏は『源語』の次の文章を引かれている。それに稿者の割注をいれてみる。

名香（みやうがう）の糸ひき乱りて、（仏に奉るお香の飾り糸を取り散らかして、）「かくても経ぬる」（「こうしてでも日を過すことが出来たのね」）など（大君と中君は）うち語らひたまふほどなりけり。結びあげたるたたり（飾り糸を結びあげている糸繰り。「たたり」は、方形の台の上に三本の柱を立て、糸をかけて縒る糸繰り台。）の、簾のつま（端）より、（奥をのぞくと）几帳（きちやう）の綻（ほころ）びに透きて（几帳の帷（かたびら）の合間を通して）見えければ、（薫が）その事と心得て、「わが涙をば玉に貫（ぬ）かなむ」とうち誦（ずん）じたまへる、伊勢の御もかくこそありけめ、（伊勢の御も、こんな風に詠んだのであろう、）とをかしく聞こゆるも、（心動かされて聞くにつけても、）内の人（大君と中君）は、聞き知り顔にさし答へたまはむもつつましくて、（憚られて、）「ものとはなしに」（「糸に縒るものでもないのに、それだのにまるでその糸みたいに」）とか、貫之がこの世ながらの別れをだに、（生きての別れをさえ、）心細き筋にひきかけけむを（心細いものとして詠んだそうな、そのことを）など、（胸に浮かべて、）げに古言（ふること）ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを（本当に古歌こそは、人の心を軽くするのに良いものだったと、そのことを）思ひ出でたまふ。

「かくても経ぬる」「ものとはなしに」は、それぞれ『古今和歌集』に、

題しらず　　よみ人しらず

806 身を憂しと思ふに消えぬものなればかくても経ぬる世にこそありけれ。（恋歌五）

――人に忘れられてわが身をつらいと思うことで命が消えはしないものなのだから、生きるに切ないわが身ながら、こんな風でも過ぎてゆく、この世であります。――

東へまかりける時、道にて詠める　　貫之

415 糸に縒るものならなくに別れ路の心細くも思ほゆるかな。（羇旅歌）

――道なんてものは、糸に縒るものでもないのに、それだのに、まるでその糸みたいに、この別れて独り行く道が心細く思われることであるよ。――

とある歌である。

伊勢の、七条の后を悲しむこと、子の親を亡くしたが如く、この時の薫の八の宮の死を傷むに似ているとして、姫たちが「糸は縒り果てて、今は音をなむ縒り合はせて泣き侍る」と察して、下なる薫が、自分を伊勢に比して、「わが涙をば玉に貫かなむ」と誦したのである、と玉上氏はここのところを注しておられる。（玉上琢弥氏『源氏物語評釈』第十巻309頁）

また氏は更に、注意すべきは、「伊勢」の名が、この源氏物語に出ること二回だが、どちらも貫之と並んでいることだ。一つは、この「総角」の巻、もう一つは、「桐壺」の巻の「伊勢貫之に詠ませ給へるやまとうた」である。そして、どちらも「伊勢」のほうが「貫之」より先行するのである。『源語』の作者の伊勢を重んずること知るべしである、と言葉を続けておられる。

それはそれとして、温子の後のわざに女房たちの集い泣く、この亭子院の一段を、『源語』の「総角」の巻がふまえているとして、これを引かれた秋山氏は、

この『源氏物語』の叙述によって、「伊勢日記」のこの条の情景も彷彿とする。中宮を弔う法要のため名香（仏前で焚く香）を供える机を飾る組糸を女房たちが縒るが、縒り終わって、いまは声を縒り合わせて泣いているという言葉を引き取って、その哀泣の声を糸にしてわが涙の玉を貫きつらねたいというのである。『忠岑集』（西本願寺本・書陵部本）に、「親の服にて」と詞書して、

藤衣はつるる糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりぬる。

という歌があり、発想を同じくしているといえようが、この伊勢

の歌からは、まさにせつない哀号の聞こえてくる趣があろう。

と言われている。なお、氏が挙げられた忠岑の歌は、『古今和歌集』では、

六　哀傷歌）

父が喪にて詠める　　忠岑

841藤衣はつるる糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける。　（巻第十

とあり、『忠岑集』に載るところとは、詞書と歌の結句とに少異がある。

「藤衣」は喪服を言い、「はつるる」は名義抄に「脱　ハナル・ヌク・ホツル」とある。喪服のほつれて抜ける糸は、嘆きに沈むわたくしという「わび人」の涙を貫きつなぐ紐となって続いていることです。（新日本古典文学大系『古今集』の脚注）

という。忠岑の歌は、亡き人をしのぶ涙が絶えることのない悲しみの長い時間を言い、伊勢は、その悲しみを今日のこの一日に凝集して歔欷するのである。

これに対して片桐氏は、「縒り合はせて」の伊勢の歌は、まことに美しく詠みなしている。亭子院のこの物語的部分は『伊勢集』でもずいぶんきれい事に書かれている、と言われる。即ち、

あれほど庇護を受け、あれほど慈愛を辱くした七条の后がなくなったのだから、混乱と愁嘆が渾然一体となって、伊勢の心中に逆まいていたはずである。事実、『伊勢集』の雑纂部には、

中宮のうせ給へりし時、かいねり濃しとて、検非違使のやらむとしければ

396深草に君まどはしてわぶる身の涙に染める色とやは見ぬ。

中宮が逝去された時、喪服らしくない表も裏も紅というかいねり襲を着ていたので、検非違使がその場から追い払おうとした時によんだ歌である。「火葬場」である深草の野辺に迷う皇后様の霊魂との別れを悲しむ私の血の涙で染めた色だと思ってくれないのかと言っているのである。葬送の日の奇矯な服装、伊勢の性格もさることながら、その混乱ぶりを示していると言ってよい。それに比べれば、同じ『伊勢集』でも、この物語的部分はずいぶんきれい事に終始しているのである。

また『古今集』巻十九（一〇〇六）にも、七条の后が薨去した後のさみしさを示す伊勢の長歌が出ている。（氏が引かれるその歌にここでも、稿者の割注をいれておく。）

七条の后、亡せ給ひにける後に詠みける　　伊勢

1006沖つ波　荒れのみまさる　宮の内は（后の宮のおかくれで、まるで沖の波のように荒れることのみひどくなる御殿の内では。

「沖つ波」は、「荒れ」に波の意で続く枕詞）年へて住みし

伊勢の海人も　舟流したる　心地して　寄らむ方なく　悲しき

に（年久しくずっとここに住んで来ました私も、頼む舟を波にさらわれてしまったような心持がして、頼る所もなく悲しい限り。伊勢自身の悲しみを言うと共に、彼女自身の出自をも詠んで、自らを「海人（あま）」に喩えた。これは、この前後に海に関した語があるので、その縁での喩えである。「舟」は海人の頼るところ、主人の后を「舟」に喩えて、その舟を失った嘆きを言う。）

涙の色の　紅（くれなる）は　われらが中の　時雨にて　秋のもみぢと　人々は　己（をの）が散りぢり　別れなば（日毎に流す紅の血の涙は、我ら宮人の中に、時雨と降って、宮居の紅葉を染めて散らせてゆく。その紅葉の散るにも似て、仕えていた人々もそれぞれに己が家路に散り別れて行ったなら。「涙の色の・・・時雨にて」は、悲しみの極みにあり、血の涙が喪服を染める意を言う。「しぐれ」は秋の木の葉を染めるものとして言う。「われら」は、忌を守って后の宮にとどまっている私ども。）頼むかげなく　なりはてて　止まるものとは　花薄　君なき庭に　群（む）れたちて（この宮内（みやうち）に頼む蔭は絶え果てて、留まる物とては、見ます君のない庭に群れ立つて空を招いている花すすきばかり。「頼むかげなくなり果てて」は、后の宮のおわさぬ上に、仲間の者もなくなっての意で「鳴き渡りつつよそにこそ見め」に係る。）空を招かば　初雁の　鳴き渡りつつ　よそにこそ見め。（その花薄が、人もなきゆえ空に向って招くであろうが、そうすると初雁は、そんな事に頓着もせず、ただ大空を鳴き渡っていることよ。「空を招かば」は、薄の穂の風に靡くのを、袖を振って人を招くと見る。「雁」は、亡き后の宮の霊魂を運ぶ鳥として、その役割を十分に荷いながらも、そ知らぬ顔に飛んでゆくあわれさの象徴である。）

と詠んでいるのである。

七条の后は六月八日に亡くなっているから、「時雨」「紅葉」「花薄」「初雁」などという景物はこの歌がおそらくは、陰暦の八月下旬か九月によまれたことを示している。つまり四十九日の直後である。（先にみた通り、温子の四十九日の法要は、延喜七年七月二十六日のことである。氏の言われる通り「初雁」や「時雨」などは陰暦九月から十月にかけての景物だから、この歌の詠まれたのは、氏の言われる「四十九日の直後」というより、それから更に二カ月程後のこととなろう。稿者注。）

にもかかわらず、亭子院は「荒れのみまさる」と詠まれ、仕えていた「人々は、己が散りぢり別れ」て行ったと書かれている。その中で、ただ伊勢だけが「舟流したる心地して寄らむ方なく」「頼むかげなくなりはて」たと言っているのである。長歌であるゆえに、悲愴にオーバーに言っている傾向があるが、かような長

歌を収録せずに、「縒り合はせて・・・」というような美しく繊細な歌をもって后の宮の他界を語ろうとするこの『伊勢集』冒頭の物語的部分があまりにもきれいごとに過ぎることをこの長歌が逆に示しているとも言える。

（二類本は、この長歌を、先の「縒り合はせて」の歌の直後に、共に亡き宮を傷む歌として並べた形でいれてある。ただ、これを続けて読むと、歌の内容に時間の上での開きがあって、並べることがそぐわない気がする。長歌の方は、片桐氏の言われるような四十九日の直後というよりも、また、陰暦の八月下旬か九月というよりも、四十九日よりさらに60日程後の、陰暦の九月下旬か十月――延喜七年の九月三十日は、これをユリウス暦に換算すれば907年11月8日となる。――とみた方がよい。その方が、「初雁」や「時雨」などの景物にも適わしい。稿者注）

やゝ引用が長くなったが、片桐氏は以上の如く、「縒り合はせて」のような、美しく繊細な歌でこの一段がしめ括られるために、温子の死を傷むこの亭子院の物語的部分は、同じ『伊勢集』の中でも、あまりにきれいごとに過ぎて書かれていると言われた。

後に述べるが、氏の指摘されるこのことは、或は、この一段で『伊勢集』冒頭の物語的部分を綴じてゆかざるを得なかった創作主体の、――女の自立を、主人伊勢の生の姿勢に賭けようと願った作者女房の、やがてはそれからの挫折に向かわざるを得なかった、――言ってみれば、悔しき擱筆のその敗亡の意識に係わって来るかも知れない。

そのことについては後の［評］で述べるとして、秋山氏の引かれた、先の『源氏物語』「総角」の巻は、その引用の終わりに、「げに古言（ふること）ぞ、人の心をのぶるたよりなりける」と言っている。これに注されて玉上氏は、「古言」は「人の心をのぶるたより」であると言う。古歌をかえりみれば、そこに人のあれこれの心情を見出して、自分一人のなめる苦しみ、憂い、悲しみでないことを、つくづく思う。それに慰められるというのではないけれども、何がなし心の、どこか軽くなるのを覚える。そしてまた、泣き惑うほどの心も、古歌にたくされる時、嘆きは、適切な表現を得て、生々しい苦しみを流して、さらさらと洗いあげられ、静かな調べとなって胸に帰る。それで嘆きが減ずることはないけれども、ほっとしばし心を休めてはくれるのだ、と言われる。

古歌が果して来た、このカタルシスのありようは、それが自作の詠の場合であっても、十分に機能し得るのではないか。伊勢は温子哀傷の生（なま）の情動を「縒り合はせて」の歌の、美しくも繊細な調べに託するのである。そうすることによって、泣き惑う程の心はさらさらと洗いあげられ、静かな調べの中に悲しみは浄化される。確かに、それで嘆きが減ずるというのではないけれども、その歌の紡ぎ出す静かな歔欷（きよき）の中に伊勢は、ひとつの心の平安をみているのだ。

それは、秋山氏の言われる、伊勢の、まさに切ない哀号であった、と同時に、温子亡き後をなお生きてあらねばならぬ己が生の自浄の詠でもあったのである。

【評】

「伊勢日記」の二類本は、前述の通り、この「縒り合はせて」の歌の次に『古今集』もこれを収録する「沖つ波」の二十五句（ただし、『古今集』は二十七句）より成るやはり温子哀傷の、これは長歌を34番歌として据えている。これに対して、一類本は、「縒り合はせて」の一段をも落して、「山川の」の歌に続けて、それまでの物語の文脈とはまったく係わりなく、

忍びて知りたりける人を、やうやう言ひののしりければ、冠（かうぶり）の箱に珠を入れたりければ、それに女の言ひつけたりける

33滝つ瀬と名の流るれば玉の緒の逢ひ見しほどをくらべつるかな。

という一条をいれてある。

「縒り合はせて」の一段を残してはいるものの、これについては三類本も同じである。

そしてこれより以下は、「この中宮、東宮の女御と聞こえさせける時、題賜はせて詠ませ給ひける御屏風の歌」18首、（三類本は17首）、「長恨歌の屏風を亭子院の帝書かせ給ひて、その所々詠ませ給ひける歌」10首、「五条の内侍のかみ御四十賀を、（藤原）清貫の民部卿のつかまつり給ふ屏風の絵」につけた歌12首、「亭子院六十御賀、京極の御息所つかまつり給ふ御屏風の歌」3首、という風に伊勢の作った屏風歌が並べられている。この屏風歌が、先の長歌の次に一・三類本と同じく「滝つ瀬と」の歌をおさめた上で、その後にこの順序とこの歌数で並べられているのは、二類本の場合も同じである。

つまり、これまで読んで来た「伊勢日記」すなわち『伊勢集』冒頭の物語的部分は、「縒り合はせて」の哀傷を、その終わりに据えた、亭子院のこの一段で終っている訳である。

しかし、その終わり方はかなりに唐突である。秋山氏はそのことを、「これまで読みすすめてきた「伊勢日記」の文脈は、「滝つ瀬と」の歌の前で断止している」と言われた。特に一類本の場合は、先の温子哀傷の亭子院の一段が、前述の通り、錯簡脱落によってか、『伊勢集』の最末尾に補入されているので、この唐突感はよけいに強く感じる。

このことに係わって、関根慶子氏は、「伊勢集の巻頭から、中宮崩御あたりまでを進めて来たが、そのあとを続けようとして、或はその辺で製作意図を破棄して、未完成のままに「滝つ瀬と」の歌のような帰属不明のものを持ち来たまま、家集的部分を従属せしめる結果となったのではないかとわたくしは考える。だからもともと、この物語

の結尾をきめること自体が無理なのではあるまいか」と述べられた。

関根氏のこの言葉を迎えて秋山氏は、関根氏の考察以上の見解は持ち合わせていないとされながら、ただこの結尾を決めがたい形で「伊勢日記」が終わることの意味を次のように述べておられる。

「伊勢日記」は温子のもとに出仕した伊勢が仲平との初恋の挫折から宇多天皇の情をこうむって皇子を産むにいたるまでの前半（第一段から第九段。稿者注）と、温子と伊勢とのあいだにかわされる「月のうちに」「久方の」の歌以来、温子の崩御にいたるまでの後半（第九段から第十四段。稿者注）と、両者基調を異にする。上昇と下降、栄光と悲惨の対照というべきか。伊勢の人生の、みずからはもとより、一族の喜びであったと語られるあの幸運は、なにを伊勢にもたらしたのだったか。伊勢は皇子の母となるという栄光をかちえたがゆえに、もしそうしたことがなかったなら、かかえこむこともありえなかったであろう憂愁の人生を生きることになった。しかしながら、それゆえにまた伊勢の、女性としての、歌人としての魅力は誇り高くかがやきまさることにもなった。

その時どきの歌の詠出において、そのことを語るのが、「伊勢日記」であるととらえるならば、温子との死別をもって「伊勢日記」が終結するのは必然的ともいうべきであろう。

伊勢の、女性としての、或は歌人としての、その前半生は温子と共にあった。それゆえに、その前半生を語る『伊勢集』冒頭の物語的部分、すなわち「伊勢日記」が、その温子との死別をもって終結することの必然性を言われる秋山氏の言葉は、稿者にはよく分かる。

そして、伊勢は皇子の母となるという栄光をかち得たがゆえに、それの代償のように、憂愁の人生を生きることになったという氏の言葉もまた、よく分かる。

そのことをよく理解しながら、しかし、稿者は、「もしそうしたことがなかったなら、かかえこむこともありえなかったであろう憂愁の人生を、伊勢は、生きることになった」と言う氏の言葉と係わって、関根慶子氏の考察にあった、「伊勢集の巻頭から、中宮崩御あたりまでを進めて来たが、そのあとを続けようとして、或はその辺で製作意図を破棄して、未完成のままに云々」と言う言葉に拘わるのである。

そのあとを続けようと願いながらも、続けることがかなわなかった、他ならぬ作者にあった、口惜しき「製作意図の放棄」、その放棄のありようにこそ「伊勢日記」の文脈の唐突な断止の理由があったのではないか。

『伊勢集』冒頭の物語的部分の作者女房は、その時々の伊勢の詠歌を採って、伊勢の前半生を象って来た。その文学的な営為のなかで、ひとりの女として、伊勢が生きてゆくその生の方向を、同性としての

熱い共感をもって追い求めて行った。秋山氏の言われる「上昇」である。

温子の許への初宮仕え（第一段）、仲平との初恋とその挫折（第一段）、大和滞在の傷心の日々（第二段・第三段）、その傷心を出でての再出仕（第四段）、仲平、時平兄弟との応酬、されど「逢はざりけり」（第四段・第五段）、仲平との訣別（第六段）、菅原道真の女婿源敏相と「平仲」こと平貞文との交渉、されど「返りごともせず」（第七段・第八段）と続く第一段より第八段までの物語の前半に於いて、伊勢は、ひとりの女として生きる自立の生を確かに手中にして行った。それは、温子後宮への出仕の最初に仲平とのはじめての恋にやぶれるという苦い経験の上に打ち建てられた生のありようではあったが、源敏相や平貞文に対する高飛車なまでの拒絶の姿勢は、その悔しさを懸命に埋めて酷薄でさえあった。

そして、悔しさの代償のようにしてかちとって行った、その開かれた女の性を策定してゆくという、まさに女の戦いは、仲平との訣別のことを語る第六段に於いて、仲平との贈答の応酬に見事に凝集された。そこのところを「人々宵の目さましてなむあはれがりける」（三類本）と、主人伊勢への傾倒を自らを客体に描写することで確かめてゆく作者女房は、その伊勢の戦いの姿勢に、自分たちの願望の代弁者を見、それに賭けたのであった。

その時病床にあった温子は、伊勢の、そのような生の選択をどう見ていただろうか。実は、その時間に伊勢は、自分では思いも設けなかった、選択せざる生を選んでいたのである。主人温子の夫である宇多帝の寵を受けるということ、それは、秋山氏の言われる、伊勢の前半生の「上昇」から「下降」への道程のはじまりであった。氏の「伊勢日記」の前半は、もう一段遡るべきところである。

それは、「栄光」というよりは既に「悲惨」の色合いに於いて濃いものがあった。

これかれ、とかく言へど聞かで、宮仕へをのみしけるほどに、時の帝、召し使ひたまひけり。よくぞまめやかなりけると思ふに、男宮生まれたまひぬ。親なども、いみじう喜びけり。仕うまつる御息所も后にゐたまひぬ。（一類本・第九段）

宇多の寵、皇子の誕生と伊勢に於いて予期せざる事件をやつぎばやに書いてゆく一類本の行文は極めて簡潔である。皇子の出生を「親なども、いみじう喜びけり」とだけ書くその本文は「よくぞまめやかなりける」と思うのは、伊勢自身の存念と言うよりも寧ろ父継蔭の感慨と読める筆致である。そして本文は、史実年序を違えてまで、温子立后という他の喜びのことを書く。

「親なども、いみじう喜びけり。仕うまつる御息所も后にゐたまひぬ」と言う。本来ならば自分の喜びを、そして幸せを書くべきところを、「親なども」と自分の喜びをも含意するかの如き譲歩の一句を置きながらも、その喜びを記述する筆は他へ他へと移してゆくのである。

伊勢は、いや『伊勢集』の作者として稿者の想定する、伊勢の侍女格の作者女房は、宇多の寵、皇子の誕生という、本来ならば、最高の幸せ人としてあるこの時点に於いて、既に来るべき主人伊勢の、その境涯の不幸を充分に予覚しているのである。（第九段）

それからの、皇子と離れて住む雨の日のながめ（第九段）、宇多の譲位と落飾（第十段）、そして皇子の早い死（第十一段）と書く作者女房は、「この帝に仕うまつりて子生みたりし人は、世に幸なき者なりければ、」（三類本・第十一段）という悔しい一条を書く。

伊勢の戦いの姿勢に、自分たちの願望の生をも賭けた作者女房の筆は、前半の高揚の筆致を沈めて今は、主人伊勢の哀傷の日々を、労わりをこめて繊細になぞってゆく。それは同時に、温子の、伊勢に対する労わりのこころでもあった。

花薄の贈答に描かれた温子の「限りなくめでたくなまめきて、世にたとへむかたなくなむおはしまし」た優しさが、今は唯ひとつ、伊勢の生きる支えとなる。（第十二段）

その温子との死別を語る亭子院の一段は、「縒り合はせて」のような、美しくも繊細な歌でしめ括られるために、同じ『伊勢集』の中でも、あまりきれいごとに過ぎて書かれている、と片桐氏が言われた。

それは、秋山氏の言われる、伊勢の、唯ひとつ、己が心の支えを失なっての、正に切ない哀号であった、と同時にこれは、温子亡き後をなお生きてあらねばならぬ己が生の自浄の詠でもあったのだ、と稿者は先に書いた。

がしかし、その半生の終わりにあって、自らの内にあった女としての悔恨や傷心を、かかる美しくも繊細な浄化の詠に於いて凌いでゆこうとするのは、それ自身、一つの生の敗北であったのではないか。

「作歌」という感性と理性のはざまの営為に、自らの宿命を越えて自立してゆこうとした伊勢と、そうした伊勢の切ない戦いの境涯を共感をもって象ってゆく『伊勢集』冒頭の物語的部分の作者の営為とに、王朝の女流の自衛の方法があった。（第六段、『平安文学研究　第78輯』掲載の拙稿）それは、一つの方法として、確かにあった筈である。

だが、その方法は、自ら選ばざる生を選ばざるを得なかった、悔やしい選択のその時点に至って、つまり、第九段よりの物語の後半に至って大きく崩れて行った。そしてここ、亭子院の温子哀傷の一段に至って、作者女房は遂に、その方法を放棄せざるを得なかったのである。

稿者はここに、作者女房の悔しき擱筆があったと思う。『伊勢集』

冒頭の物語的部分の、やや唐突な断止の理由を、稿者はそのように思いみるのである。

この『伊勢集』冒頭の物語的部分に書かれていることのすべてが伝記的事実であったとは考えられない。伊勢を「大和に親ある人」「この女」「つかうまつる人」「この帝につかうまつりて子うみたりし人」「心うしといひし人」のように第三人称的、物語的に描いているのだから、これは当然といえば当然だが、しかし、あえて名を隠し、あえて三人称的に朧化しているのは、その物語的書き方の背景にかなりの事実が隠されていることを暗示しているとも言えるのではないか。それとともに私が興味深く感じるのは、主人公である伊勢の設定が、愛と恋に苦しみながら真摯に生きる女性としてなされている一方、七条の后に親しく仕えながら宇多帝の寵を受けるに至った召人（めしびと）としての主人公の在り方を最高のものとしてとらえていることである。伊勢の詠歌を主として用いながら、その詠まれた状況をかなり大胆に改変しつつこのように伊勢の像を描いている物語的部分の作者は、やはり伊勢と同じような女房であり、彼女が「伊勢の御息所」と呼ばれていることに憧れたり誇りにしたりしている人物であったかと思われるのである。（片桐洋一氏『伊勢』）

そういう「伊勢日記」の理解が一方にある。そのことを承知しながら稿者は敢えて、ここに王朝の一女流歌人の不幸を読む。伊勢にあったその恵まれた美質と才能のゆえに、それらが無ければ或は、逃れ得たかも知れない口惜しい悔恨の半生を、『伊勢集』冒頭の物語的部分の中に読むのである。と同時に主人伊勢の、その悔恨の半生に、女の自立を賭けてみて、だが遂にはそれを果し得なかった作者女房の口惜しいこころをも読むのである。

（完）

**付記**　本稿の成稿に当って、秋山虔氏の『伊勢』（集英社、昭和60年8月刊）及び、片桐洋一氏の『伊勢』（新典社、昭和60年8月刊）から、多くのご教示とご示唆をいただいたのは、先の『伊勢日記私注』㈠㈡㈢㈣㈤㈥の場合と同じである。

『伊勢日記』の私注を終わるに当って、改めて物語の全文を挙げる。物語本文はその校合をも兼ねて、西本願寺本系統の本文（所謂一類本）と定家自筆本系統の本文（所謂三類本）を併記する。左に挙げたものが、以前にも断った通り、一類本の本文である。その右傍の括孤で囲んだ部分は、三類本の本文で、黒点は、一類本の本文にはありながらも、三類本では、その詞を欠いていることを示している。左本文の黒点は、その逆の場合である。

# 伊勢日記

## 第一段

（いずれの御時にかありけむ）　（ゆ・）

寛平みかどの御時・・・・・、大御息所（おほみやすどころ）と聞こえける御局（みつぼね）に、大（やま）

（う）　・・・・・（など

和（と）に親ある人さぶらひけり。親いと愛しくして、なべての男は・

も）（ざりけるを・・・・・・・・・）　（年頃・・

・あはせじと思ひてさぶらはせけるに、御息所（みやすどころ）の御弟（おほんせうと）、いとねむ

・・・）　（しばしはさらに聞かざりけるに）

ごろに言ひわたり給ふを、・・・・・・・・・・・・・・・・・いかが

（嘆きたりけるを、年頃経にければ、

ありけむ。親いかが言はむと思へど・・・・・・・・・・・・・・・

聞きつけてけり。（れど・）　・　（りけ）（とて、ことに言

・・・・・・・・・さるべき宿世にこそあ・らめ、・・・・・・・・・・

はざりけり。ただ）（は）（きもの）（と・・・・・・）

・・・・・・・・・・・・若き人・頼みがたく・・ぞ・あるやとぞ言ひけ

・・・　・・（大臣に）（とられ）　（も・・）

る、年経るほどに、その時の大将の婿になり・にけり。親聞きて、

（こそなど言ひければ、この）・・・・・

さればよと思ひけり。・・・・・・女、限りなく恥づかしと思ふほ

（人おこせたりける。この女）　・・

どに、この男のもとより、・・・・・・・・・・・・・男の親の家は

（りけ）（所）　（歌をなむ）（たりけ

五条わたりな・・る・に、来て、柿の紅葉にかく・・書きつけた

る）

り。

（紅葉の・）
一、人住まず荒れたる宿を来てみれば今ぞ木の葉は錦織りける
（見て）
・・女、いと心憂きものからあはれにおぼえければ、
（ひ）　・（りけり）
二、涙さへ時雨にそへてふる里は紅葉の色も濃さぞまされる・
・・　・（の紅葉）（さし）（なむ）　・・・・・
と書きて、ねずみもち・・・につけて・・やりける。ながら月ばか
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
りのことなるべし。男も見て、限りなくめでけり。

第　二　段

・・　（こ）（ぬれ・）（我を）（よも）　（もと）
かく人の婿になりにければ、・・今は・・とはじと思ひて、・

（ける）（行きて）　（女・・・・・・
ありし・大和に・・・しばしあらむと思ひて、・かくいひやりけ
・）
る。
三、三輪の山いかに待ち見む年経ともたづぬる人もあらじと思へば
（まだあるほどに、心ぼそげにのたまへれば、いみじくあはれになむ。
枇杷の大臣の御返し、・・・・・・・・・・・・・・・
「たづぬる人も」とあるは、人わろくも）
・・・・・・・・・・・・・・。
（おくれ）（と思ふ）（ならなくに）
四、もろこしの吉野の山にこもるとも思は・む人に・我おくれめや
（男これをいとあはれと思ひて、返しをばえせで、かくよみたりけ
この歌返し、男詠みて、奈良坂よりおこせける・・・・・・

る）（枇杷の大臣）
・。　・・・・

（消えにし）　（まさ）
五、世をうみの泡と浮きたる身にしあればうらむることぞ数なかり
ける

（奈良坂のわたりにぞ追ひつきておこせたりける）
・・・・・・・・・・・・・・・。

（の）
女・返し、
・　（を）
六、わたつうみと頼めしことのあせぬれば我ぞわが身のうらはうら
むる

（とてぞ、道中にて、かへしやりける）
・・・・・・・・・・・・・・・。

第　三　段

（住む・・）（さうざうしく寺めぐりせむと思
大和に三月ばかりありけるに、・・・・・・・・・・
ひてありきけるに、）　（て・・・）　（の十日
・・・・・・・龍門といふ寺にまうでたりけり。正月・十一
あまりになむあり）（る）（見ればその堂）（あり）・（滝は雲の中
日ばかりなり・・けり。・・・この寺の・・さまは、雲の中より
より）（ちく）　（仙・・）（岩屋）　（く）（つも
滝は落つ・るやうに見ゆ。山の人の家・といふは、いたう年経・
り）　（の）　（あはれに尊くおぼえて、涙落つ
・て、岩の上に苔八重むしたり。・・・・・・・・・・

る、滝に劣らず。　　（たぐひなくめでたく見えて）

・・・・・・・。見知らぬ心地に、いと悲しう・・・・・・・・・も

（がなしく都思ひやられ）（・・・・・・・・・・石）

ののみあはれにおぼえ・て、涙は滝に劣らず。橋のもとにしばし

（ながむ）　（この寺）　　（と）

あ・・るに、・・・いと暗うなりぬ。「雨や降らむとすらむ」・

（にあ）（々）（そぎければ・・・・・「雨は降らじ」（など」・・）

供な・る人といふ・・・・。法師ばら・・・・・・「雪ぞ降らむ」

（雪さ□ばかりにて・・）　　（る。）（ある）

と言ふほどに、いみじうおほきなる雪かきくらし降れば、・・人々

（「いざ）　（ひければ）・・・・・・・・

・・「歌詠まむ」と言ふに・・、この詣でたる人、

七、裁ち縫はぬ衣着し人も無きものをなに山姫の布さらすらむ。

と詠みたりければ、・・・さらに異人詠まずなりにけり。（今日）いまは道に出

・　・　・　（こと）

でて、越部といふ所に宿りぬ。かの御寺のあはれなりしを・思ひ

（又）

出でて、・、

（で）　　（身の世に）（るらむ）

八、みもはてず空に消えなで限りなく厭ふ憂き世に身の帰りくる。

（ぞ）　（る）

とひとりごちて、袖もしぼるばかりに・泣きぬらしけり。

第　四　段

（つかまつりし所）　（「はや・）（らせよ・・」と

かかるほどに、御息所の御もとより、「やがて上りたまひぬ。・

おほせ給ひければ、「はやく上りたまへ。もとより）（こそ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・宮仕へをせよ
したまへ）・・　（と思はせて・・・・・・）（に）
・・・とこそ思ひしか。君達をとやは言ひし」と言ふも、死ぬ
（る心地すべ）（「よしなき君だちをはや。思ひかけじ」など言ひ
べく恥づかし。・・・・・・・・・・・・・・・・・・
て、あけて内裏参り）・　（る）（ひだ）　（も見交して・
・・さてのぼりて、仕うまつりあるくに、この男、文おこせつ
・）（れに）　・（会はで見交すほど）　（男あ
つあはむと言へども、聞きも入れであるに、この男の兄なる人、
りける。）（あの人はよにも訪はじ・・）（なにかたのみたまふ）
・・・「今は、その男を男と頼みたまふか。あな幼な・・・・・。
（へ・・・・・）（切に）　（は見つつも、・・・・
我を思ひたまへ」など・・言へど、文ばかりをなむ通はしける。

さらに）（であ）
・・・逢はざ・りけり。
（けしき・）　（は知りたり・・・）　（出で）
かく言ふほどに、元の人もけしきを見聞きけり。女、里に・・て、
（秋）（など）　（尾花）（なん）・・・
・前栽・・のをかしかりける・・を、・手すさびに尾花を結び
・（このつらかりし）（来）（詠みたりける、）
たりけるを、はじめの・・・人の見て、・・・・・
（り）
九、花すすき我こそ深く頼みしか穂に出でて人に結ばれにける。
（詠み）（物を）・・・・・（など）（をり。「人）
と・・て、・・聞きたることのあるはや」と・言ひければ、「・数
（・・・・・・・・・・・・・など）
ならぬ身は、何か、ともかくもあらむ、同じうは」とて、うちと

(さま・)(ひければ、男も)(ひ、女もあはれに思
けたるけしきに言ふを、・・・・あはれと思ふ。・・・・・さ
へ)
れど逢はでやりつ。

第　五　段

(兄)(・・・・・・男)　　　　　(かの)(心)
この人のはらからなる人、「などか参りたまはぬ。・・人の・
(き)
つらさを出でゐて思すか」とて、

一〇、ひたぶるに思ひなわびそ古さるる人の心はそれぞ世の常。

返し、

(も)　　　　　(け・)
一一、世の常の人の心をまだ見ねば何かこのたび消えぬべきものを。

(かく言ひけるほどに、めぐる年の神無月になむありける)　(兄)
・・・・・・・・・・・・・・・・。この男
・(・いと)　　(に)　(りぬる)　(詠みたり
「御心の・・つらければ、吉野へなむまかる・・」とて、・・・・
ける)
・・。

(ぶる)
一二、ひたすらにいとひはてぬるものならば吉野の山に行方知られじ。

(かへし)
返歌・

一三、わが宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ。

（今は）　（にあひに）（かむ）（吉野とは）　（人の心つ
・・維摩会へ・・・ゆく・とて・・・・言ふなりけり。・・・・・
らしとて言ふにはあらざりけり）
・・・・・・・・・・・・・・・・・。

第　六　段

・・・・・・（この人の妹におはしましける）（ときこえけ
かかるほどに、・・・・・・・・・・・・・・御息所・・・・・
るは、御薬の騒ぎにて、）（ましくなむし）　（る。・）（宵に）
・・・・・・・・・・・・・・・悩み・・・・・・たまひければ、　・・
（て）　（に）（この人の聟になりにし男君の）　（者）
集り・さぶらふを、・・・・・・・・・・・・・・蔵人といふ人し
（・・・・・・あからさまに・・参りたまへ。物聞えむ）（ひけ
て、はじめの男・・・・・・「下におはせよ」・・・・・・と言はせ
り。・）（返り言しげし・・・・・・・・）　（古言）（なむ）
たれば、・・・・・・・憂しと思ふ心をしばしといふ心・を・・言
（ひやりける。）（されば、男、）
はせたれば、　・・・・・・・
（を）
一四、宵の間にはやなぐさめよ石の上ふりしに床もうちはらうべく。
（と詠みたりける。女）
・・・・・・・・・返し、
・　（あれ）
一五、わたつうみとなりにし床を今さらにはらはば袖や沫と消えなむ。
（ければ）（々・宵の目さましてなむ）　（る）
と言ひたるを、人・も・・・・・・・・・・・あはれがりけり。

## 第七段

・・（せ・）（そひて）（いと）（くあり・・）・・
また人数とも思はぬに、・・・心ざし・・深き人ぞそひて言ひ
・・（男）・・・・・・・・・（ざりけれ）
ける。・文おこすれど、返りごともせね・・・ば、
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
一六、山賤はいへどもかひもなかりけりこひこそそらにわが答へせよ。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
なほ返りごともせざりければ、「いなとも、いかにとも、わが君
・・・・・・・・
わが君」とせむれば、
一六、（なせとも）
一七、いかにせむ言ひ放たれず憂きものは身を心ともせぬ世なりけり。

（る）
とばかりいひて、やみにけり。
（て・・・）（世に）（大臣も流されたまひける。
かくいふほどに、・・騒ぎ出で来て、・・・・・・・・・・・・
聟にて）（より・・・・・・）（その人も流され）
・・・兵衛佐なる人、解かれて但馬介になり・・・・・にけり。
（たよりのありければ、）（・思ひて・）（ここ）
・・・・・・・・・・近くてはさもおぼえで止みにしを、かく遠
（なりたまふ・）（にやりたりければ、）
く流されにたるがあはれなることといひたる・・・・・・返り
（かくなむ）
ごとに・・・。
一七、（瀬を）
一八、かけて言へば涙の川の水脈早み心づからやまたはなかれむ。

女

・返し、

一九、　　（す）　　・

二〇、年経ぬること思はずは浜千鳥ふみとめてだに見・べきものかは。

（の）　　（の詠みたりける）

夏、・いと暑き日盛りに、同じ男、・・・・・・・・・

二〇、

二一、夏の日の燃ゆる我が身のわびしさにみづこひ鳥の音をのみぞなく。

（しもせず・）

返りごとなし。

## 第　九　段

・・・・・・（この女は、これかれ）　　（ず。）

これかれ、・・・・・とかく言へど聞かで、宮仕へをのみ

## 第　八　段

（また、）　（を、）・・　　（く年を経

・・・同じ女、・・年頃、言ふともなく言はずともなき・・・

てよばふ）　　（「ここら年

・・・・男ありけり。返りごともせざりければ、「年経にける

月に、）　　（言ひ・）　（「見つ」とぞ

を、などか見つとだにのたまはぬ」とはべりければ、・・・・・

言ひたりける。それより）　（をば）　　（ぞ・・・・）

・・・・・・・・・・・・この女・・「見つ」となむ名をばつけた

・・・・・

りける。立ち返り、男、

一八、

一九、立ち返りふみゆかざらば浜千鳥跡見つとだに君言はましや。

（て）・・（る）（う）（けしから し・けるほどに、時の帝、召し使ひたまひけり。よくぞまめやか

ぬ人の言を聞かざりけると、心にも、親なども）（ひわたりけるう なりけると・・・・・・・・・・・・・・・・・・思ふ・・・・・・・

ち）（はらみにけり。）（さて、）（皇子をぞうみたてまつりける）

・に、・・・・・・・・・・男宮・・・生まれたまひぬ・・。

（我が）（みづから）（とうれしと思ひ）（りし）

・・親など・・も、いみじう喜び・・けり。仕うまつる・御息所

（なり）（にけり）（生みたりける男皇子は）（の宮）

も后にゐ・たまひぬ・・。・・・・・・宮を・・桂・・といふ所

・・・・・・（ひけるに）

に置きたてまつりて、みづからは后の宮にさぶらふ・・。雨の降

（ゐたりければ・）（后の）（の詠み）（たまへり

る日、うちながめて、思ひやりたるを、・・宮御覧じておほせら

け）

・る。

（三）（の）（恋）（て）

三、月の内に桂の人を思ふと・や雨に涙の添ひて降るらむ。

御返し、

（三）

三、久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる。

## 第十段

（ゐ）

かくて、帝おり・させたまひて二年といふに、御髪おろさせた

（王）（み・）（うて）（ぞ）

まひて、仁和寺といふところに住ませたまふ。・時々、后の宮に

(は)　(ける。・・・)(后の)(も、仕うまつる人も、限りな
・おはしまし通はせたまふ。・・宮・・・・・・・・世に知
う・)　(み・)　(帝)
らず悲しと見たてまつる。もと住まひたまひし所に、宮おはしま
(とき)　(仕まつり)・・　(出で)
して、御こと聞こしめす。さぶらひし君達など召し集めて、御下
(ふ。・)(后の宮の)　(詠みていだしたまへり)
したまはすに、・・・・御方より・・・・・・・・・・。

(三)
二四、言の葉に絶えせぬ露は置くらむや昔おぼゆる円居したれば。

(四)
御返し、
二五、海とのみ円居の中はなりぬめりそながらあらぬ君が見ゆれば。

となむ。

## 第十一段

(子)　(人・)(世に幸なき者なり
この帝に仕うまつりて・生みたりし皇子は、・・・・・・・・・
(る。)
ければ、うみたてまつりし君は八つにて・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・五つといひし年亡せたまひにけれ
・(いみじく)(と思へど、かひなし・)・・・・・・・・・・・
ば、・・・・悲しいみじとは世の常なり。嘆くものからかひなけ
・・(死なむ・・)(へど死なれねば・)(泣きわた)・・
れば、世にあらじと思ふも心にかなわず、夜昼恋ふ・・るほどに、
(こにな)　(言へ・)(ける)
このみつと・つけたりし人のもとより・・。

（三五）　（も）

三六　思ふより言ふはおろかになりぬればたとへて言はむ言の葉ぞ

（し）

なき。

（と言へど、）　（なりにけり）

・・・さらに物もおぼえねば、返りごともせず・・・・・。

（帰り来る）　（に・）　・　（ひとりかこ

またの・年の五月五日、ほととぎすの鳴くを聞きて、・・・・・

ちける）

・・・。

（三八）

三七　死出の山越えて来つらむほととぎす恋しき人の上語らなむ。

## 第　十　二　段

・・　（元の）　・・　（は）

今は身を心憂がりて、ただ宮仕へをのみなむしける。后の御心・

（めでたく）　（ぐひ・・・）

限りなく・・・・なまめきて、世にたとへむかたなくなむおはし

ましける。

（ほどの）　（は）（などいと）　・

この人・・曹司に・前栽・・・・をかしう植ゑてなむ住みけるを、

（の頃）　・・・　・・　（宮より）

秋・・里にまかり出でたりけるに、・・・などか、今までは参ら

（れ・・）（花の盛りもみな過ぎぬべし。）・・・

ぬ。遅く参るめれば、・・・・・・・・・・・・曹司の松虫も

（ぬべかめり・・・・・・・）（なむ）　　（りける）
鳴きやみ、花ざかりも過ぎぬべしと・・のたまはせたれば・御返

（ごと）・・・・・・・
り・・に聞こえさする、

（二七）　　（り）
二八　松虫も鳴きやみぬなる秋の野に誰呼ぶとてか花見にも来む。

御返し、

（二八）
二九　呼ぶとしも声は聞こえで花すすきしのびに招く袖も見ゆめり。

（させたりけり）
また、かく聞こえたてまつれる、

（二九）　　（に）　（て）
三〇　人も着ぬ尾花が袖も招かればいとどあだなる名をや立ちなむ。

御返し、

（三〇）　　（け）
三一　我が招く袖とも知らで花薄色変るとぞ思ひわびつる。

## 第十三段

歌召す奥に書きてまゐらす

（三一）
三二　山川の音にのみ聞く百敷を身をはやながら見るよしもがな。

## 第十四段

・・・・・　（なやましくせさせたまひ）　（に
この后の宮、常にあつしく・おはしまし・けるを、つひに六月八

かくれさせ・・）（いみじく）（て、）日ぞ亡くならせたまひにける。あさましく、いらなく悲しく・（夜昼）（恋ひたてまつ）仕うまつりし人、さながら集まりて、・・泣きわぶ・・・・るに、・（御）（折・・）（の・・）・・・後々の・わざのいそぎにやうやうなりぬ。雨いたく降る日、この・・・（下・）（籠）（ゐたり）・身を心憂しと言ひし人は、曹司になむをり・・・ける。上の人々（緒・・・）（し・）集まりて、御わざの組・の糸をなむ縒りける。下なる人、糸は縒（果て）（ふへかな）（・・ただ）・（ここにりいでたまへ・・・りやと・・今は何わざをかしたまふ、と言ひは・・・）（なむ見出だして）（侍る・）・（げ）（れば）たれば、雨を・・・・・・・ながめてなむとぞ言ひあひたりける。（おもと）（し・・）（は）（を）上の御・・たちの返りごとに・糸は縒り果てて、今は音・なむ縒（ひおこせた）り合はせて泣き侍ると言へりけ・・れば、下なる人、（なる）

（三）

四八三　縒り合はせて泣くらむ声を糸にして我が涙をば玉に貫かなむ。

【通解】

本文は、二つの伝本を併記することになったが、通解の口語訳は、西本願寺本系統の本文で付けてみることにする。

宇多の帝の御時代に、大御息所と申し上げました、（関白様御息女の）温子様の御局に、大和守を父に持つ女性がお仕えでございました。父君の（大和守継蔭様）は（その女性を）この上もなくかわいがって（おいでございました。）（それで）ありきたりの男との結婚は決して許すまいと心決めて、宮仕えをさせておられたのでございます。（それが、これは誠に思いもかけませぬこと、御主人）温子様の弟君の（仲平様が、その方に）ひどく心を砕いて思いを寄せなさる日が続きまして、（お二人の間に）さて、どういう経緯がございましたのでしょうか、（とうとう結ばれておしまいになったのでございます。）

（そこで）父君が、どのように言うであろうかと（その方は）安まらぬ思いを致していたのでございますが、（父君の継蔭様は、）「こうなったのも、（そなたに）天与の運命というものであろう」（と却って慰め顔におっしゃるのでございました。）（ただ）「若い人というものは、変らぬ愛情を頼みおゝすことは難しいものよ」と、そのことばかりを危惧しておられたのでございますが、（父君の、その不安は現実となりまして、）年余にして、（仲平様は、）当時、大将（でいらっしゃった源の家）の婿に迎えられてしまったのでございます。

（受領の身の）父君は、（そのことを）耳に致しまして、案じた通りだったわいとお嘆きになるのでございました。その方は、（父君に対しまして、また、それ以上に周囲の思惑を気に致しまして）恥かしさに身も細る思い、（ついには、内裏を出て、父継蔭様の里邸に身を潜めることになったのでございます。）

（ところが）仲平様は、（憶面もなく、）五条の辺りにある継蔭様のお邸においでになりまして、（折から色ずく）柿の紅葉に歌を書いてつけたものでございます。

そなたも、そなたの父も久しく住むことのなかった五条の邸は、（そなたを追うて、今）訪れてみれば、折からの季節に、柿の葉も綿を織りなすように美しく見えることであるよ。

その方は、（それをごらんになって）辛い思いは変わりませぬものゝ、（季節に託した）情趣の、そのあわれに誘われる気持は押え難うございまして、

涙までが時雨とともに降る、人に古された私の住む家では、木の葉の紅葉も（私の流す血の涙で）ひとしお濃い色になっているのでございます。

と詠んで、鼠黐（ねずみもち）の枝につけて返歌を贈ったのでございました。（それは、その方が宮仕えに出た年も二年の後の）秋のことでございました

でしょうか。（後に承りますと、）仲平様は、（その女性の返歌を）ごらんになって、むやみと感心なさったそうにございます。

（実は、こうしてお話し致しますその女性と申します方は、他でもなく、私どもの主人伊勢のことでございます。）

こんな風にして（仲平様は）大将家に聟入りをしてしまわれましたので、（主人伊勢は）今となってはよもや、私を訪ねて来ることなどないであろうと思いまして、宮仕えにあがる以前に（父君と）お住いになっていた大和で暫くの時を過ごそうと思い（決め）まして、（仲平様に、こんな風に言っておやりになったのでございました。）

私が今志すところは、「恋しくはとぶらひ来ませ」と古歌に詠まれた、あの大和国三輪の山麓ですが、そこでどんなに待ってあなたにお目にかかれることでしょうか。いくら年が経っても、あなたは訪ねてくれるはずもないと思いますので。

まだ都にいる間に、心細そうに、このようにおっしゃいましたので、私どももひどく沈んだ思いをしたものでございます。それにしても「あなたは訪ねてなどくれはしないのでしょうね」などと言うのは、本当にみっともないことでございますよ。

（ところで、主人の歌に対する仲平様のお歌は）

たとえ、もろこしの吉野山だとて、そなたがお入りになるのなら、ついて行かないと思うような私ではありませぬ。どこへなりとついて参りますとも。

（とお伺い致しましたが）仲平様は主人の歌にひどく心打たれまして、返歌をお渡しになることがお出来にならず、ただこの歌を独りごたれるばかりであったそうに、（人伝てに聞いたものでございます。）（後略）（本段のみ三類本による。）

主人伊勢の大和滞在は三カ月ばかりでございましたが、（その間に私どもは）龍門という寺への参詣にお供致しました。あれは寛平も四年のお正月のことだったでしょうか。その寺の有様は（ずいぶんと壮大でございまして）庭にかゝる滝がまるで雲の中から落ちるようでございました。仙人たちが住んでいた家と申す所は、ひどく年を経て、岩の上には苔が重なるように生えておりました。（都住まいで）見慣れない私どもには、ひどく悲しく、（目に映る）すべての物が哀れに思われまして、流れる涙を止めかねたものでございました。橋のたもとで暫く立っておりますと、ひどく暗くなって参りました。「雨かも知れないわね。」と（主人が）申しておりますと（居合わせた）法師たちが、「雪でございますよ。」と言ううちに、大層大きい雪が目の前が見えなくなる程に降って参りました。（そこで）私どもが（おもしろがって）「歌を詠みましょうよ。」と言いますと、主人は、

裁ったり縫ったりしない衣を着たという仙人も今はいないのに、どうして山姫は、このように大きい布をさらしているのかしら。

（何だか、むなしくって。）

と詠んだものですから、私どもも（すっかり悄気て）黙りこんでしまったものでございました。それから街道に出まして、越部という所に泊りました。（そこでも）あの御寺での哀れだったことが（いろいろに）思い出されまして、（主人は）

お寺もお山も今は朧ろ。こんなにも辛い命を引きずりながら、限りなく、いとわしいと思うこの人の世に、私はまた還って来てしまったのですね。

と独り言にそんな風に詠んで、（あとはもうただ悲しく）涙で袖もしぼる程に泣き濡らしたものでございました。

（主人伊勢の）大和滞在の日々は、こんな風でございましたが、（その寛平四年の年も秋深い頃）、御息所の温子様の許から、「直ぐにおいでよ。」（と再出仕勧誘のお言葉がございました。）（父君の継蔭様は恐懼して）「宮仕えにきっと専念なされ。そう思うて、そなたを出したのだ。若様を好きになれなんどと、ちっとも言いはしなかったよな。」と（娘への叱責は言葉に秘めて）再びの宮仕えのことを勧めるにつけても、（主人伊勢の心は）死ぬ程の慚愧にせめがれるのでございました。

（再出仕は明けて寛平五年のお正月のことでございましたでしょうか。）主人は、苦い思い出を振り切るように温子様御奉公専一に勤めておいでした。（それゆえに年余にして再会した）仲平様が、再びあいたいとしきりに寄こすお手紙だけは受け取っても、もはや褥を共にすることは絶えてございませんでした。（そうする中に、これは主人にとっては全く思いもかけないこと、）仲平様の兄君の時平様までが（思いを寄せて来られて、）「今でも、弟のやつを男として信頼出来ると思っておいでか。もっと大人におなり。私のことを思ってくださってはいかが」と、手紙をお寄こしになるのでございました。（けれども主人伊勢は、）手紙だけはもらえば返しも致しましたが、決して体をお許しになることはございませんでした。

そうする中に、仲平様も兄の時平様と主人のことをご存知になったようでございます。（再出仕の一年も秋に入った頃でございましたが、）主人が、（五条の）父君のお邸におさがりになって、秋前栽などの趣きを深めておりますのを、手すさびに結んだりなさっていることがございましたが、（そこに訪ねて来られた）仲平様がそれをご覧になって、

尾花が穂を出すように、人目にもおおっぴらに、そなたは兄者と結ばれてしまったのだね、私こそ、そなたと結ばれたいと内心深く頼みにしていたことでしたのに。

と詠まれて、「兄者との事は確かに聞いているよ。」と言葉強く抗議なさいました。（それに主人は、）「人数にも入らないような私ですもの、何でそのような人さまの噂にまでなるようなことがございましょう。同じことなら、はじめに許したあなた様と噂になりとうございました。」とすっかり心を許したかにみえるその様子を、素振りにまでみせて仲平様に対されたのでございました。（それを仲平様は）嬉しいことにお思いのようでございましたが、しかし、（主人伊勢は、二度と）体を許すというようなことだけは、決してございませんでした。

（そうした頃、二度とは許すまいと心決めた）仲平様の、兄にあたる時平様が、（主人伊勢の里に便りを寄こされて）「なぜに参内なさらぬ。あの弟のやつの心のつれなさを、里にゐて嘆いておいでか」と書いて、

一途に思い苦しまないように。女が棄てられる男の心はこれが普通なのです。

（と慰めてございました。）それへの返歌に主人は、

普通の男の心なんて私はまだ経験がありませんのでどう仕様もありません。とにかくこのたびのショックで消え入ってしまいたいような思いでございます。

（と詠んだのでございました。）

（それからどの位の月日が経ってのことでございましたでしょうか、やはり）この（兄にあたる）時平様が、（便りをお寄こしになって）「あなたの御心のつれなさがひどく身にこたえますので、（このまま都にいるのも切なうて）吉野へ身を隠してしまいとうございます」とおっしゃって、

もし、一途に私を嫌がりなさるようなことであるのなら、私はこのまま吉野山に隠遁して行方知らずになってしまいたいと思っております。

（と訴えておいでございました。）それへの返歌は、

私こそ隠遁の地として最後の楽しみにしている吉野山に、あなたの方が入ってしまわれるなら、仙人が頭につける髪挿を二人でつけて共に生活しましょうよ。

（と主人伊勢は言ってやったもののようでございました。）（どうやら、時平様の訴えはご本心からのものではなく）維摩会に見参されるのを、吉野へとお戯れになったようでございました。

あれは、主人伊勢が、時平様と吉野山の歌など取り交すことのあった年の暮あたりだったかしら、御息所の温子様にはご不例のことがおありになって、（方々が御病床に）侍っておりました。（そんな時）はじめてのあの方が、（紀の）蔵人という女房を使いに立てて、（主

人伊勢の許に）「私の曹司においでなさらぬか」と言って寄こされたのでした。

（主人はそれに）「ほんの一刻でもいゝ、あなたに裏切られて沈んでおります私の心を慰めたいのです。（ほかのお方のことはその後で・・・・・）。」（そんな古歌の）趣きを（認めて、お断わりの返事を）持たせたのでございました。（ところがあの方は押し返して、こんな歌を届けて来たのでございます。）

そんなにおっしゃるのであれば、宵の間に、辛いと言われるあなたの心を早く慰めてしまってください。あれからずいぶんと御無沙汰をしていました寝床の塵を払っていただくためにも。

それへの返し（に主人は）

荒れる海ではないが、あなたに忘れられ見限られて、荒れ果ててしまった私の寝床でございますのに、それを今更、あなたにお出で願わうと払い清めたりしましたならば、塵を払う私の袖は、海の沫となって消えてしまうことでございましょうよ。

と言ってさしあげたのでございました。その返り言（に温子様の許に侍っておりました）方々は、（みな宵居のまどろみから覚めて、交々に）共感の声を惜しまなかったそうにございます。

（ところで、時平様のことはともかくとして、弟君の仲平様には、お別れと申しましてもよい文を差し上げたりすることのありました、そんな頃、主人伊勢の許には）それは人並みの男とも思っておいでではないお人でございましたけれど、またまた深い情愛を見せて、まるでぴったりくっつくようにして執拗に求愛するお人が現れて参ったのでございます。（その人は、情愛のたけを尽した）手紙を寄こすのでございますが、（主人は）返事も致さないものでございますから、（こらえ切れなくなったのでございましょう、こんな風に訴えて参ったのでございます。）

大空に満ち溢れる程のわが思いも、山賤に等しいとるに足りない我が身のゆえに聞き届けてはもらえませぬ。せめては、空に満ちる我が恋情よ、谺となって、私の呼びかけの哀切に答えては呉れないだろうか。

（それでも、主人は、）依然として一顧もお与えにはなりませんでした。（そこで、そのお人は）「いやとおっしゃるなり、なじってくださるなり、ともかくも何か言って頂きたい」と、ひたすらに主人の返事を懇請して参ったのでございます。（そうまで言われて、然し、主人は、）

どのようにあなたにお答えしたらよいのでしょう。言葉にそれと言い切ることはかなわないのです。恋とは憂きもの、わが身ひと

つも思いのままにならないのでございますから。

と言うばかりで、そのお人とのことは終ったかに承わりました。

ところが、思いも設けぬことに、（皆さまもご存知の）道真公筑紫へご配流の事件が起って参りまして、（公の縁辺であった）そのお人も、兵衛佐より左降されて、但馬国に流されて参りました。（そのお人が）続いて京にいるのならば、依然として人数とも思いはしないのですが、今は（お舅の罪に連なって）このような左遷の憂き目に逢い、遠く但馬国に流されてゆくその哀れを、主人も、不憫の御ことと言い贈ったのでございます。（そのお人は、）それへの返り言に（こんな歌を寄こしたそうにございます。）

心にかけて優しい便りを頂きましたので、押え切れぬ私の涙の川は滝つ瀬となり溢れ出てまいります。それにつけても、そんな優しい方と結ばれることもなく、異郷に流れてゆく身を思えば、我知らずまたも泣かれてしまうのでございます。

（さて、道真公の娘聟にあたる方と相前後して、）主人伊勢には、これは、確と求婚すると言うでもなく、さりとて求婚しないでもないという、本当にとらえどころのない、それでいて執拗に言い寄っておいでの方がございました。（そういう曖昧なお方でしたから、主人は）少しも相手になさらずにいましたところ、（その方は、）「あなたに思いをお伝えしてからずいぶん久しくなりますものを、せめて私の手紙を『見た』とだけでも、どうしておっしゃってくださらぬのか」と怨じて参りましたので、（主人は、あの方の言われるまゝに、「あなたのお手紙は見ました」とだけ言っておやりになったようでございました。）（そんな事があってから）主人は、その方の事を揶揄なさって、「見つ」という渾名をつけて呼ばれたようでございます。（一方、待ち焦れていた主人の返事をもらった）あの方からは、即刻、（こんな歌が届いたのでございます。）

すぐさまお便りしなければ、筆跡を「見つ（見た）」というだけでも、あなたはおっしゃってくださるでしょうか、おっしゃってくださるはずがありません。だからまたすぐにお便りしたのです・・・。

それに返した（主人の歌は、）

何年もの間、お手紙をいただいているということを思わなければ、手紙をとどめておいて、それに返事を書いてあなたにお見せしたりするでしょうか。

（というものであったそうでございます。）（そんなことのあった）夏のこと、ひどく暑い日盛りに、同じあの方から、

夏の日のように、恋ゆえに燃ゆる我が身の苦しさから、水恋鳥が鳴くように、「みつ（水）」とおっしゃってくださるあなたを求

めて、独りで声をあげて泣いておるのでございます。

（そのような歌が届きましたが、それに、主人はもはや）ご返事を書こうとはなさいませんでした。

（藤原の仲平様、仲平様の兄君の時平様、それから、今までお名前をお明かしすることは致しませんでしたが、皆さまもよくご存知の道真公の、その娘聟にあたる源敏相様、そしてあの平貞文様）そうしたお方からの熱いお言葉にも、（主人伊勢は）少しも係わりになることなく、（温子様専一の）お勤めに日を過して参ったのでございますが、（これは、まことに思いも設けませぬこと、主人は、温子様夫君の）宇多の帝から情（なさけ）を受ける身となったのでございます。

（今まで）よくもまあ、取るに足りない男たちの言うことを聞かなかったことよ、と思っています中に、男宮（おとこみや）様がお生まれになったのでございます。（そのことを、主人の）父継蔭様は殊の外にお喜びだったそうに承りました。

（主人の）お仕えしております温子様もまた、お后におなりというお喜びを得られました。

（お生まれになった）宮様は、（まだ幼ないまゝに、西の京の）桂の里におあずけ申し上げて、主人は（続けて）温子様の許にお仕えでございました。（そんな日頃、）雨がうち続きました日、（主人は）沈むこゝろに、（桂の若宮様の上を）思いやってでございました。

（それを、）温子様がご覧になって、（こんな風に）おおせられたのでございます。

月の中に生えると聞く桂、その桂の里に置いて来た幼ない人を思うて、今降る雨のその上に、そなたの皇子恋しさの涙も流れておいでなのですね。

温子様への主人のお答えは、

皇子の住む里は、月の中に生えている桂の、その桂の里でございますから、月の光ばかりを頼みにしているのでございます。実は、桂の里に住んでおります皇子は、お后様の御庇護ばかりに、ただもうお縋（すが）り致しておるのでございます。

そんなお歌でございました。

（主人伊勢が、）そのような（寂しい）月日を過しておりますうちに、（思いもかけず、）宇多の帝は帝位を退かれたのでございます。

（それから）二年目、（三十路（みそじ）を僅か過ぎたばかりで、このたびは）出家剃髪ということで、仁和寺という所に住まわれるようになりました。（その後、帝は）お后の温子様のいらっしゃる朱雀院には、時々通うていらしてでございました。

（そのような帝のことを）温子様は、たいそう悲しいことに拝されて

おいでした。以前にはお二人の常のお部屋でありました（朱雀院の）一部屋に帝はおはいりになって、御精進をお召しあがりになるのでございます。

（そんな折には、帝が有髪の頃、親しく）お仕えしていました君達の皆様方をお呼び集めになって、お下がりをくださいます。（その時のことでございましたでしょうか、）温子様のお部屋の方から（皆様のところに、次のような歌を詠んで届けておいでございました。）

お話の言葉の一つ一つに、きっと涙の露が置いていることでございましょう。今となっては還ることのない、そのかみの団欒を思わせる円居に時を過しておいでですと・・・。

（温子様のお歌には、主人伊勢が）お答え致しまして、

円居の中は露ではなく、悲しみが海のように涙を溢れさせております。昔に変らぬ帝でありながら、昔のまゝではあられぬお姿を拝しておりますと・・・。

と詠んで（お届け致したそうにございます。）

（主人伊勢が）宇多の帝にお仕えするようになって、帝の御子をお産みになった（ことは、以前にお話し申し上げましたが、）その産み奉った皇子は五つになったばかりの年に亡くなってしまわれたのでございます。（離れて住むことの多うございました皇子の死に、主人は）それはもう、たいそうお悲しみで、どんな言葉も主人のその悲しみを言い表す術とてございませんでした。

いくら嘆いても嘆きは尽きませず、（いっそのこと）この身を亡きものにと思うても死ぬこともかないませず、（ただ、幼い人を思うては）夜昼となく焦れ続けていらっしゃいました時、（以前に主人が）「見つ」と渾名をつけましたあの（平中様の）ところから（こんな慰めのお歌が参ったのでございます。）

心に思うているよりも、それを言葉にした時の方が、心がこもっていないように見えてしまいますものですから、私の今のこの心を喩えていう言葉とてもございません。

（平中様のお歌は、あの方の性格のそのままに誠意に溢れたお歌でございましたが、悲しみのために）ご自分を失なっておいでの主人には、それへのご返歌は到底かなわないのでございました。

（そのようにして、悲しみの年が暮れまして、）再び巡って来ました夏の五月五日、（折から）ほととぎすの鳴き渡るを聞きまして、（主人は独りごたれるのでありました。）

死者の世界との間に在ると聞く死出の山を越えて来たであろうほととぎすよ。恋しい私のあの皇子が、今頃はあの世でどうしているのか、この私に語っておくれ。

（主人伊勢は皇子を亡くしました）今は、己が身の不遇をつくづく情なく恨めしいと思う、（その思いの中で、お后の許での）宮仕えに専念する、ただその一事を我が事としまして悲しみに堪えていたのでございました。（そうした主人に対して）お后様の御心はこの上もなく優艶で、慎ましく（労りに満ちて、）この世に喩えるものとてもない（お優しさで）ございました。

主人伊勢は、そのお部屋から見えるお庭に、美しい秋草を植えて住んでおりましたが、その秋草の咲き盛ります頃に、（一時）里下りを致しておったのでございます。（ところが、里住みの日数があまりに重なりますものですから、不審に思われたお后様から、）「どうして今まで出仕なさらないの。お帰りが遅くなるようだと、（そなたのかわいがっていた）お部屋先の松虫も鳴き止み、尾花の盛りも終ってしまいましてよ」と、（帰参をお勧めの）お言葉がありました。（それで、主人は）ご返事に（次のような歌を詠んで）お届けでございました。

お前を待っているよとおっしゃって頂いた松虫も、今はもう鳴き止んでしまったそうにございますが、それなら、誰が私を呼んでくれているということで花見にお伺い致せばよろしいのでございましょうか。

（主人のこの歌に対して、お后様の）お返しのお歌は、

そなたの言うように、確かにそなたを呼ぶ声は聞こえませぬ。声は聞こえませぬが、ひそかにそなたを招く花すすきの袖は見えるようですよ。

（とございました。そのお歌に主人は）また、こんな風に詠んで差し上げたのでございます。

誰だって着ることもない、見栄えのしなくなった尾花の袖に招かれて、私がお尋ね致しましようものなら、いよいよのこと、心の定まらぬ奴と評判が立ってしまうことにならないでしようか。

（これを受けられましたお后様の再びの）お歌、

そなたを招いていたあの袖は、実はこの私がそなたを招く袖だったのですよ。それとは知らずに、そなたは、そなたがかわいがっておいでの尾花の色が衰えたと言って嘆いておいでだったのですね。

（あれは、延喜も四年の、秋の頃でございましたでしようか、醍醐の帝から主人伊勢の許に）歌のお召しがございました。（主人は恐懼して、いくつかの歌どもを献上致したのでございますが、その献上歌を書きとどめました草子の）奥に、（その時の思いをこんな歌に）託しましたのでございます。

（昔は宇多の内裏にお仕えした私でございますが、今は華やかな）宮居のことは、山の谷川の高い水音のように、ただお噂とし

て伺いますばかり、願わくば、谷川の「水脈（みお）」が早いと申しますその如く、このわが「身」をも昔にかえし、（以前に変らぬ晴れがましい姿をそのままに、今ひとたびの）宮居に伺候する幸せの身となりとうございます。

（主人伊勢がひたすらに敬慕して参りました）お后の温子様は、久しい以前から病気がちでいらっしゃいましたが、とうとう（延喜の年も七年の）晩夏の頃におかくれになってしまわれたのでございます。

（そのあまりに若い御逝去は）どうにも信じ難く、悲しみは刺となって心に痛く、お傍に侍っておりました者たちは、（お后様御生前のお居間に）残らず集まって、現し心もなく嘆き悲しんでおりますあいだにようやく、四十九日の御法要の用意をする時となりました。

（そんな頃の、晩い夏の）雨がひどく降る日、（先に）わが身を「心うし」と言って、（また、宮仕えをしていました）主人伊勢は、（語る人とてもなく、孤り御自身の）曹司で（降る雨をながめて）おいでございました。（御生前、お后のいらっしゃった）上のお居間に仕えていた女房たちは、（今も同じお居間に）集まって、（同じ雨の音を聞きながら、）御法要に使う組緒の糸を縒り合わせておりました。

（そこへ、）下の曹司におりました主人伊勢が、「もう、糸は縒ってしまわれましたようね。今は、何をしておいでなの。私は雨を見て泣いておりますの」と上の方へ言上致しましたところ、（㊟この条は三類本による。）上にいる女房たちの返事には、「（私たちも同じこと。）糸は全部縒り終わって、今はみんなで声を寄り合わせて泣いております」と言って来ましたので、主人伊勢は（再び、こんな歌を詠んで差し上げたのでございました。）

より合わせて泣いていらっしゃるという皆様方の声を糸に縒って、私の涙を玉にして貫ぬいていただきたいものでございます。

（完）

高松短期大学研究紀要

第 20 号

平成2年1月31日　印刷

平成2年1月31日　発行

**編集発行**　高松短期大学

〒761-01　高松市春日町960

TEL（0878）41－3255

FAX（0878）41－7158

**印　刷**　高東印刷株式会社

高松市東山崎町596番地